



【2017-08-16】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、
人生を味わう



今週の雑感

『夏の田んぼを歩く』

長野修二

夏の田んぼを歩く

七月終わりから八月に入ると、「土潤いてむし暑し」、「大雨時行う」という言葉どおり、むし暑さは厳しく、雷鳴が激しくなり、どしゃぶりの雨が降る季節になってきました。

二十四節気を読み返してみると、多くの人間が自然の風景を巧みに言葉にしてきたことがわかります。



夏の田んぼの散歩は、この言葉どおり少し歩いただけでも大汗をかき、日によっては突然雷鳴が轟き、土砂降りに見舞われてしまうことを覚悟して出かけていくことになります。

それでもこの季節特有の風景がそこにあります。





夏のたんぼは、あまり風情がないかも知りません。

あるのは、どこまでも続く緑の絨毯でしょうか。

それでも緑の絨毯と空の青さのコントラストは、この季節ならではの風景です。

しかも、冬の空と違い青空の中にいくつもの形を変えていく雲がみられ、その雲の動きを追っているだけで興味が尽きないものです。

さらに、風になびく稲をみていると、その揺らいでいる景色は人間の身体感覚として、とても心地よいものです。



また、この時期の稲はぐんぐんと成長し、実をつけて稲穂となって逞

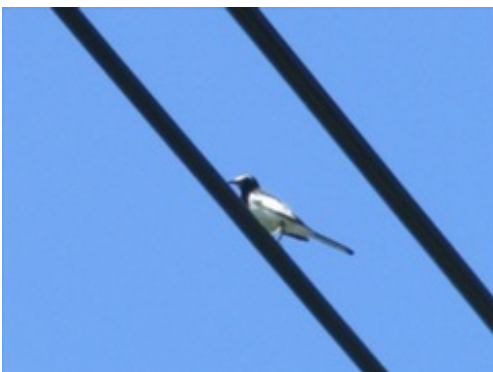
しくなります。

田植えの時期にみた弱弱しい稲とは見違えるような姿になっています。



夏の時期は、やはり蛇などの危険な生き物を避けるため田んぼのあぜ道に入ることができません。

どうしても遠目に田んぼ全体を眺めることが日課になってしまいます。それでも、この時期、ちょうやトンボ、あるいはつばめや野鳥と出くわすことも多くなり、田んぼのあぜ道もなかなか賑わっているものです。





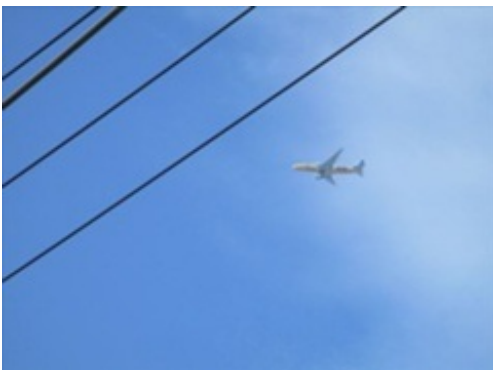
散歩する道も冬と違い、どうしても同じようなコースになります。
そんなときこの地は田んぼの真ん中を線路が通っており、散歩がてら電
車をみることも日課になってきます。
単調な夏の田んぼの風景の中を通り過ぎる電車は、緑の絨毯とともに
、それなりに絵になってきます。
梅雨の時期には、田んぼの脇に咲いたあじさいの花とともに眺めるこ
ともできます。





とくに時刻表をもってでかけるわけでもなく、その日の散歩にあわせて通り過ぎる電車をながめているだけですが、散歩のちょっとしたアクセントになります。

また、青い空を眺めていれば、そこに飛行機が飛んでおり、雲の切れ間を飛行していく景色もこの季節だけのものでしょうか。



秋や冬、あるいは春の田んぼはあちらこちらと歩きまわれますが、夏の田んぼの散歩は、普段歩く道すがらの偶然の光景に感動がやどってくるようです。

道すがらの草花といったこの季節に現れる植物たちでしょうか。



この時期の田んぼの一番の風景は、なんととっても稲穂の成長でしょうか。

1週間も経てば見違えるほど大きくて重たそうな稲穂になることです。まさに田んぼが一番輝く瞬間まじかの光景です。

稲穂が重さで垂れ下がってくると、いよいよ黄金に輝く季節が訪れま

す。

そしてそれは収穫が迫ってくる季節の合図でもあります。

夏の田んぼは、夏の暑さとともに稲の成長とその力強さがもっとも伝わってくる季節でもあります。

じきに稲穂がたわわになると、季節の変わり目がやってきます。

空が高くなる季節も、すぐそこに迫っています。

そして田んぼの景色がすっかりとかわってしまうまで、「禾乃登る」

まで、二週間足らずでしょうか。



